

1

1 ことば
2 A ウ
B イ
C 工

(完答)

3 I 国
II 言語

(完答)

4 一つの国には
5 個人
6 イ

7 1 言語
2 思考
3 言語
4 表現

(完答)

8 イ

2

9 a 共有
b 形成
c 無数

1 a 女手
b 養う
c 心根

d 寒かった

2 仕事
3 (記述題)
4 A ウ
B イ
5 念

(完答)

6 一人ぼっち
7 父が事故に

8 I 仔犬
II 飼う
9 工
10 大丈夫

(完答)

11 糸口
12 ウ

2

3 八年ぶりに父の介護から自由
になった。たばかりだから。

(同意可)

配点	
19	21 各2点×7=14点
23	6点
その他	各4点×20=80点
100点	

1

文章冒頭の問いかけなので、この文章の話題を答えればよい。通読する際にもこの問いかけの答えを意識しながら読み進めよう。

2 「世界中にある①とは何か。」ということを考える前に「言語とは何か」という問題について提起しているので、(A)には

「まず」があてはまる。(B)の前では「地球上の言語・民族を広く視野に入れていく」、後では「わたしたち一人ひとりの日常にもっと即してみると」と述べられており、前後で「広い↑↓せまい」という関係になっているので、「しかし」があてはまる。(C)は、言語・ことばをどのように学ぶかについて、前の内容に引き続き後の内容が述べられているので、「そして」があてはまる。

3 線②の通りに「いくつ」を「何か国語」に置き換えると、「世界中に言語は何か国語あるか」となる。直後の一文にも注目すると、「言語の数＝国の数」ということになる。

4 線③を含む文の冒頭に「ゆえに」という順接のはたらきを持つ接続語があるので、ここより前で述べられているはずである。ちなみに「故に」と書く。

5 一つめの④を含む段落の冒頭に「このように考えてくると」とあるので、ここまでの流れをふまえて考えたい。直前の三段落で「個人はく自分誌を持っています」「二人の個人の中にさまざまなことばが内在している」とある。

6 直前の「それ」は「言語学による言語の分類・規定」を指している。直後の一文で「ことばはくもつと大きなもの、全体的なものだ」とあることから、⑤には「小さなもの」「一部のもの」といった内容があてはまるとわかる。

7 「上記のことを整理すれば、およそ次のようになるでしょうか」という表現からはじまっているので、ここまでの内容とていねいに照らし合わせながら考えよう。(2)と(3)は、「思考と言語を結びつけるプロセスが『言葉』ということになる」という表現ではなく、次の段落の「思考から言語に至る」という表現にも注目して考えよう。

8 ⑥のための総合的・総体的やりとりのプロセスとしての『ことば』とあるので、「ことば」の目的や役割について述べられているところを探そう。「言語学はく」の段落に「人と人をつなぐためのことばは、言語の種類や形だけではなく、もっと大きなもの、全体的なものだということになる」とある。

9 「形成」は整った形に作りあげることである。「形勢」などの別の同音異義語を書かないようにしよう。○「無数」の「無」は縦棒の本数も「三」の点の数も「四」である。

2

1 c 「心根」とはここでは性格のことである。d 「寒」は横棒の本数に気をつけよう。正しい字形で覚えることは基本中の基本である。

2 「へばり付いていた」「こわばり」のようなもの」という表現から、マイナスのことだと考えられる。この後を読み進めると、仔犬の話↓天気の話↓仕事→仕事→上手い話…と展開していくこととなる。

3 線②の直後から、ここでの「ゆつくりする」とは「自分以外の誰かのために尽くす」のではなく、「自分の人生を楽しむために時間を費やす」ことだとわかる。「自分以外の誰かのために尽くすのはもう充分だから」という表現から、いままでは誰かのために尽くしてきたということが読み取れる。

4 「とにかくいまの母には少しゆつくりして欲しい」と思っていたが、話しているうちに「もしかすると、いまの母はく(B)を欲しているのかも知れない」と思ってしまうのである。その直後の「職場の人がく母が淋しそうに見えたからではないか…」と書いている部分にも注目したい。

5 「自責」とは自分で自分の過ちを責めることである。「自責の念にかられる」という表現でよく使われるので覚えておこう。

6 ④の直後の母のつぶやきから、「介護という枷から放たれた」母は自由になると同時に独り身になってしまったことが読み取れる。「独り身」と同意の五字の表現を探そう。

7 線⑤よりも前の部分で、電話で話している場面から過去を振り返っている場面に切り替わるところを探そう。

8 ⑥の直前の「それで、仔犬の話は終わった。でもくわたしのなかにはく」という表現から、仔犬の話は終わらなそうだと奈緒が考えていることがわかる。「返事は先延ばしにする。でもく実際にどんな仔犬ちゃんなのか見せてくれるっていうからく」と母は言っているものの、奈緒は、それで終わることはなくきつともらってくることになるだろうと考えているということである。

9 「仕事が上手いかわからない」という悩みを打ち明ける時に「声のトーンが下がらないよう」にするのは、母に余計な心配をかけないためだと考えられる。線⑦の後の「もしかするとく母の優しい言葉を期待して、わざと弱音を吐いているのかもく」というところも合わせて考えよう。

10 期待していた「つらかったら、いつでも帰っておいで」という優しい言葉とは異なる言葉が母の口から出たので、「え——？」という反応になったのである。この後で母が奈緒に対して「大丈夫」とくり返し言っていることからわかる。

11 二行後の「そうやってお父さんが一生懸命に名前を付けてくれたんだもん」という母の発言から⑨には奈緒の名付けに関係のある言葉があてはまることがわかる。

12 「いまいち仕事→上手いかわからないだよね」という弱音を吐いた時のマイナスの気持ちから「なんだか自然と唇に笑みが浮かんできた」というプラスの気持ちへの変化である。変化にはもちろんきつかけがあり、この場面でのそれは「母親が『大丈夫』と言ってくれたこと」と「自分の名前の由来をくわしく聞き、そこに込められた父の気持ちを知ったこと」である。

以上